

五城目町のほこり

# すばらしい先輩たち

3

五城目町教育委員会



## 目 次



鳥 井 森 鈴

—— 「秋田追分」の生みの親



渡 辺 彦 太 郎

—— 私費を投じた事業



中 村 徳 也

—— 短歌に生きる



草 皆 五 沼

—— 俳人の医者



大 石 孫 右 衛 門

—— 川の改修と新田開発



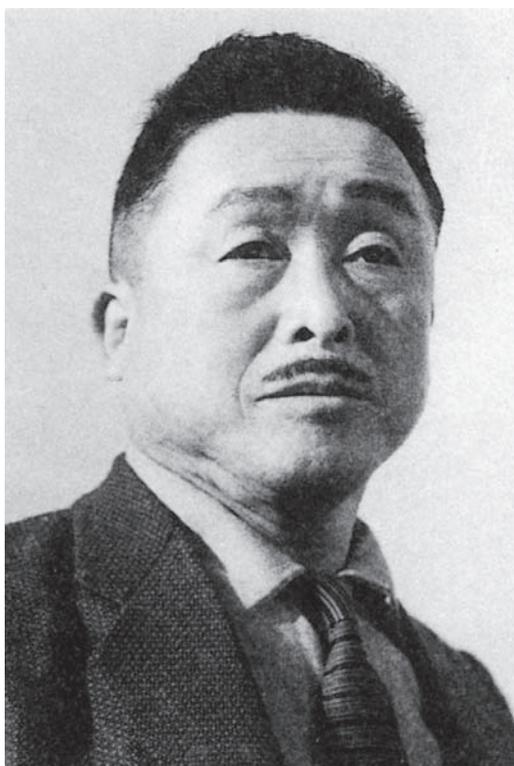
渡 辺 銀 雨

—— 川柳をみんなに



福 田 笑 迎

—— 天才的画家



## 鳥 井 森 鈴

---

### 「秋田追分」の生みの親

「秋田追分」全国大会が、たくさんの歌い手と会場いっぱいの聴衆を集めて、毎年五城目町で行われています。さかんな大会のようすを、秋田追分の生みの親である鳥井森鈴しんれいが見たなら、どんなによろこぶでしょう。

## 民謡好きの子ども

鳥井儀助ぎすけのちの森鈴は、明治32年（1899）3月18日、馬川村かみひ上樋口ぐち字切通（岩野）の農家に生まれました。

儀助が馬川小学校に入ったころの五城目町は、芸能げいのうのさかんなにぎやかな町で、佐藤久太一座がありました。一座の佐藤スワや沢石キサは、人気のある民謡みんよう歌手でした。五城目町の「市」は、掛け茶屋が45か所もあったりして、お祭りのように人出があつてにぎやかなものでした。市では民謡の歌い手が流して、かせぎ場つがるになっていました。市にいくと、芸人たちの歌う秋田の民謡ばかりか、津軽の民謡も聞くことができました。

子どもの儀助は、いつの間にか民謡が好きになっていました。市の日は学校から急いで帰ると、芸人たちの歌が聞きたくて町へいくようになりました。

歌い手の後について歩いて、小声でいっしょに歌っていると、「おや、このわらし、歌こ上手だごど。おめえ、歌こ好きだが。」と、いわれることもありました。そんなときは、儀助はにこにこして、「うん。歌こ好きだ。」と、こたえました。そうこたえるたびに、儀助は「たくさんの人の中で、民謡を歌ってみたいものだ。」と思いました。

たくさんのお聴衆から、大きなはく手をうけている、舞台の上の自分を想像していました。

## 馬といっしょに歌う

小学校を卒業した儀助は、家の農業を手伝い、駄賃だちんつけの仕事があると、家の馬をひいて荷物運びにでかけました。

馬のたづなを手に、村を過ぎると道の両側にひろがる田や畑にひびけとばかりに、儀助は声を張りあげ胸の底から歌って歩きました。その歌をだまって聞いていたのは、いっしょの馬でした。いや、そうではありません。田畑で働く人びとが、聞いていたのです。働く手を休め、腰を

のばして、少年の儀助の民謡を聞いてくれていたのです。

儀助の美しいのびのある声は、風景にひびき渡って、農民の歌である民謡にふさわしいものに人びとには思われました。

民謡歌手として、なによりも大切なのは、はりがあってよくのびる声といわれていますが、そうした声を儀助は生まれつき持っていました。身体は小さい方でしたが力が強く、若者たちの草相撲でいつも活躍していました。それだけに分厚い胸で、だれにも負けない肺活量はいかつりょうを持っていました。いつまでも楽々とつづく声に、人びとはおどろいたものでした。

## 民謡歌手になりたい

大正3年(1914)15歳になった儀助は、民謡の歌手になろうと心に決めました。

農業は家の仕事ですから、それを止める気はありません。祖先からはげんでつづけて来た農業は、儀助にとって大事な仕事で、それをついでいこうと思っています。

しかし一方では、好きな民謡で人気者になり、人びとを楽しませ、しかもお金もかせげたらどんなにいいだろう、と少年の夢がふくらんで来るのでした。

民謡には、自信があります。

儀助は、民謡のけいこをするために、五城目の知りあいの芸能のグループに近づき、いっしょに歌いはじめました。

若い儀助にとって心強かったのは、鳥井家の本家の鳥井与四郎と組んだことです。芸名を如月じよげつという与四郎は、三味線しゃみせんがとくいでした。如月の伴奏で儀助の美声は、いっそうひびき、「ぎすけー！」と声がかかるほど、町で人気が高くなりました。

まるい子どものような顔の儀助が、お



日本民謡協会年次大会の優勝カップ

となも顔負けの歌上手なのに、人びとはおどろいたり感心したりしたのです。

けれども、舞台に立つ芸人になるには、勉強することがたくさんあるのに、儀助は気がついていました。そこで、内川村の二代目秋田五郎から民謡歌手にはない芸を学びました。こうして幅広い芸を身につけたことが、のちに鳥井森鈴となる、人びとをよろこばせる芸能人をつくっていったのです。

## 追分節

17歳になった儀助は、秋田民謡では一番むずかしいといわれた追分節を、正しく歌えるようになりたいと思いました。

「市」の芸人の歌を聞いて、自然におぼえた追分節でしたから、正確さには自信がありませんでした。そのころは、「追分をちゃんと歌えたら一人前だ。」と歌い手たちは、<sup>ひとりまえ</sup>いっていたものでした。儀助は、ひとつの決心をして追分節を勉強しようとしたのです。

追分節は、<sup>しなの</sup>信濃の国（長野県）の宿場追分宿で歌われた<sup>まご</sup>馬子歌で、悲しみをおびた声を長く長く引いて歌う民謡です。この歌い方のむずかしい「信濃追分」は、特に日本海側の各地に伝わり、北海道の<sup>えさし</sup>「江差追分」などが有名になっていました。

「おれさ、追分、教えてくれねべが。」

そういわれて、沢石キサは儀助の顔をじっと見ました。キサは、子どものときから熱心に自分の歌を聞き、小声でいっしょに歌っているのを知っていました。また、儀助の人氣が上がっているのも知っていました。

「おや、おや。このおれから追分を習いたいて。」

キサは、少しおどろいたふりをしました。

「んだ。おれの追分は聞きおぼえで、自信を持って歌えねえ。しっかりと歌えるようになりたいす。なんとか、教えてもらいたい。たのおむす。」

「おめえは、いい声してるし、息もよくつづくから、りっぱな歌い手になるよ。なんといっただって、一生けん命だから。よし、教えてやるよ。」

自分がたのまれたことに、キサはうれしくなっていました。佐藤久太

一座の中でも、キサは年上になっています。年齢を考えると、若い儀助が、自分の後継ぎのように思われて来るのでした。

儀助が沢石キサから習った追分節は「在郷追分」<sup>しゃんご</sup>です。

「在郷追分」の節まわしは、歌の中で「あん、あん、ああん」と無理だと思われるくらいにユリをきかせ引きのばして歌うので、「あんあん節」などともよばれていました。

歌い方は、たいへんむずかしく、引きのばせるだけ引きのばすために、息つぎに苦勞する歌にくい民謡でした。難曲のわりには、「在郷追分」つまり「いなかの追分」と、さげすんだよばれ方をしていたのです。

尺八の伴奏までつけて熱心に教えるキサ、熱中する儀助、めぐまれた才能に、ぐんぐんのびる若い時期でもあったので、たちまち儀助は自分のものにしてしまいました。

## 秋田追分

五城目町の古川町のかどに、芝居小屋<sup>しばいごや</sup>の「五城座」がありました。ここには、民謡一座がやって来ては人びとの人気を集めていました。儀助も民謡一座が来るたびに、聞きに通いました。

ほかの聴衆とちがって、儀助は歌の勉強に通ったのです。舞台上で歌うのを聞いていると、やっぱり職業歌手だと感心する人もあれば、これなら自分の方が上手かも知れないと思ったりする人もいました。

大正8年（1919）に江差追分が流行して、五城座に江差追分を売りものにしてやって来る一座もありました。

三浦為七郎一座がやって来たとき、聴衆から飛び入りで江差追分を舞台上で歌わせるというのでした。

まわりの人びとから、

「儀助、飛び入りせ。」

「飛び入りすれ。おめえの方が、連中よりうまいぞ。」

などと声がかかりました。そのうちに、勝手にさげんだ人がいたので

「飛び入り、鳥井儀助。」

その大きな声よりも、大きなはく手が起こりました。そうなる、もう舞台上に上がって歌うしかありませんでした。

水を打ったように、静かに耳をすましていた場内は、歌いおわると割れんばかりのはく手にかわりました。あちこちから声がかかりました。20歳の儀助は、大きな自信を得たのでした。

大正10年（1921）になると、江差追分は全国で流行しレコードもよく売れていました。この年も、儀助は五城座で飛び入りして江差追分を歌いましたが、それがきっかけで宮野カネ子一座に加わるようになります。

森山の鈴虫のように美しい声だというので、「森鈴」の芸名で民謡歌手として出発したのです。22歳になってのデビューは、歌手としてはむしろ遅い出発でした。けれども、職業歌手になるまえから、名前はみんなに知れていましたから、各地を巡業すると森鈴の人気は高くなる一方でした。

民謡歌手としてスターの道を上りはじめた森鈴には、もっと大きな目標があったのです。

それは、追分流行のときに新しい秋田の追分をつくることと、聴衆を笑わせ楽しませる芸をつくり出すことのふたつでした。

苦心の末、森鈴は秋田地方の在郷追分などに、江差追分の上品な節まわしを取り入れるなどして、「秋田追分」をつくりました。秋田の四季や秋田の女性の愛と悲しみを歌詞にした、あかぬけた秋田追分は、発表されるとたちまち大きな話題になりました。

いったん、森鈴が秋田追分を歌い出すと、聴衆のなかには、ほおを流れる涙もぬぐわず聞き入る人が多かったといえます。

ファンが集まって新しくなった五城座で森鈴会をつくったのが、大正13年（1924）秋、森鈴が25歳のときですが、この会はその後県内各地にできました。



初代若乃花からおくられたテーブルかけ

## レコード吹きこみ

大正15年（1926）3月のある日、田んぼにいた森鈴は、近づいて来る人力車を見ました。人力車は、すすんで行き森鈴の家の前に止まりました。かけつけた森鈴の目の前に、車からおりたのは後藤桃水<sup>とうすい</sup>でした。

桃水は民謡研究者として有名で、そのころは日本民謡協会長をつとめていました。その会長が、森鈴にわざわざ会いに来たのです。

おだやかな口調で、桃水はいいました。

「きょ年、秋田の民謡大会で、わたしが注文して秋田追分を歌ってもらいましたが、あなたの追分はすばらしい。どうでしょう、レコードに吹きこんでみませんか。」

森鈴は自分の耳をうたがいましたが、目の前には会長の後藤桃水がいます。

「レコードで、秋田追分と鳥井森鈴を全国に売り出しましょう。」

そういわれて、森鈴は「おねがいます。」

と桃水に頭を下げました。桃水と上京した森鈴は、「日蓄<sup>にっちく</sup>レコード」で秋田追分をはじめて吹きこみました。

その2年後の昭和3年（1928）、別のレコード会社から出した秋田追分のレコードが、ベストセラーになりました。29歳の森鈴は、民謡の全国的スターになったのです。



舞台姿（昭和41年）

## その後の足あと

昭和5年（1930）、それまで苦心してつくりあげた「秋田万歳」を森鈴は発表しました。

伝統芸能の秋田万歳をひとりで演じながら、その合い間にこっけいな話や身振りや民謡などを入れて楽しませるというものでした。ショーの形の、森鈴が考え出したこっけい芸は、たいへん人びとにうけ、人気はますます上がりました。秋田五郎に習った芸が生きたのでした。

戦争中は、工場や鉱山などの慰問で、東北・北海道をまわりましたが、戦後の昭和22年（1947）からは一座をつくり、東北・北海道を巡業するようになりました。そうしたいそがしい中で、干拓が話題になりはじめた八郎瀉を民謡にした「八郎節」を作詞、作曲しています。

昭和38年（1963）に64歳になった森鈴の民謡へつくしたことをたたえて、みんなで民謡碑を雀館公園にたてましたが、八郎節はそれに刻まれています。

いろいろな賞を森鈴は受けましたが、五城目町は功労者表彰、秋田県は文化功労章をおくって、功績をたたえています。満80歳になる10日前の昭和54年（1979）3月8日に亡くなりましたが、最後まで歌いつづけた人でした。

秋田追分全国大会は、平成2年（1990）から開かれています。



民謡碑

参考資料／『ふるさとの唄』鳥井森鈴（昭和52年）



# 渡 辺 彦 太 郎

---

私 費 を 投 じ た 事 業

## 川 欠 け

『五城目町史』の年表に「嘉永3年（1850）6月16日、この日から20日まで大雨、馬場目川こうずい洪水となり被害大。」とあります。

このときの洪水で、五十目村（いまの五城目町）の朱巖院（川寺）下から新町下までの川岸が、大きくこわれました。村の中心部が400間（約720メートル）も川欠けにあったのに、人びとはおどろき、おそれました。そこで、村の3人のお金持ちが、それ以上岸がくずれこまないように、応急の工事をしました。

五十目村の東がわから南がわにかけて、富津内川と合流して水量の多くなった馬場目川が流れています。村の外がわにそって、大きなカーブを描く川すじを、洪水になって勢いをました水流は一直線に走ろうとしますから、岸をけずってしまうのです。大水のたびに、くずれた川岸の欠け方はひどくなるばかりでした。

村人の屋敷がけずられるばかりか、家の土台の下も、そのうち欠けこむかも知れません。そうなったら、手のうちようがありません。

## 川の改修工事

渡辺彦太郎は、久之助を父として文政元年（1818）5月4日に、字上町93（小池町）に生まれています。村のお金持ちのひとりである久之助は、12年間も村の肝煎（村長のような役）をつとめていました。

そのあとをついで、嘉永元年（1848）に彦太郎は30歳で肝煎にな



そのころ、川欠けのひどかった川岸

りました。馬場目川の大洪水は肝煎になって3年目のことです。

若い肝煎の彦太郎は、ただちに五十目村の洪水の被害届を秋田郡奉行へ出しました。届の書類といっしょに、川欠けの復旧工事を藩でしてくれるようにという願書も出しました。

願いの書類を出しておいてから、彦太郎は奉行所に出かけて行って、「応急の工事は、私たち村の主な者たちがお金を出し合ってしまった。しかし本工事を早くしないと、次に大水が出るともっと欠けこむと思います。それはわかっているのですが、本工事をするだけの力は、五十目村にはもうありません。なにとぞ、藩のお力をお願い申し上げます。」

と、郡奉行の小田内丈助に願いました。

五十目村の願いは聞きとどけられ、「五十目村下欠けこみ改修工事」は、次の年の嘉永4年に着工となりました。

この藩の工事は、こうりかたごかいはずとりしらべやくせい郡方御開発取調役加勢おのという役人をしていて渡部斧松まつが、現場の責任者となりました。

斧松は、もとは山本郡ひやま桧山町（いまの能代市桧山）の百姓でした。力がおとろえていた秋田藩をもとのようにさかんにしようとして、新しい産業をおこしたり、開発をしたり、いろいろとつくしていました。八郎瀧の湖岸を干拓して、新しい村渡部村（いまの若美町払戸渡部）をつくったのも斧松でした。

そうした熱心な藩のための活躍がみとめられて、斧松は百姓からあしがる足軽格かくの役人にされて、開発の係をしていたのです。

彦太郎は、村の中の川欠け改修工事の仕事の関係で斧松と知り合いました。

仕事の上で、彦太郎は斧松からたくさんのことを教えられ、多くのことを学びとりました。それだけでなく、百姓だった斧松が百姓のためにしようとする生き方、考え方も、彦太郎は学びとりました。このことは、彦太郎のすすむ道を決めたように思われます。



いまの渡辺家（小池町）

## 私費を投じる

川欠け改修の藩の工事は、ただくずれてしまった川岸をなおすだけではありませんでした。

大水のときに、流れが強く当って来るのを防ぐようにしようというのが、斧松の立てた計画でした。それによると、川筋のまがりを350間（約630メートル）も掘りかえるという大工事でした。

工事現場で斧松のもとで働いた彦太郎は、大きな土木工事のしくみや工法まで、学びとることができました。嘉永6年（1853）から、斧松にみこまれた彦太郎は、工事の責任者をつとめるようになりました。

さしもの難工事も、7年の長い年月をかけて、安政5年（1858）に完成しました。これによって、五十目村は洪水の害の心配がなくなりました。彦太郎が藩から請負<sup>うけお</sup>った工事でしたが、工事費は不足で、多くの私費を投じて仕上げたのでした。

嘉永6年は、ペリーが浦賀に来航したり、プーチヤチンが長崎に来航した年です。安政5年は、幕府が日米修好通商条約を結び、「安政<sup>あんせい</sup>の大獄<sup>たいごく</sup>」がはじまった年に当たります。そういう近代の足音が聞こえて来る時代に、彦太郎は川を改修する難工事に取り組んでいたのです。

## 新田開発

あるとき、彦太郎は工事完成を祈るために太平山に登り、萩形<sup>はぎなり</sup>（いまの北秋田郡上小阿仁村の萩形ダムの所にあった村）に下山しました。山奥のわずか16戸の萩形は、藩の御薬園の係をしていた彦太郎が、薬草を買い集めている村でした。

村の人びとは、訪れた彦太郎にアワもちの食事を出してもてなしてくれました。そのとき、彦太郎は山村の人びとも、米のご飯を食べるようにならなければ、と思いました。そして、さっそく工事にとりかかり、山地に用水路を通し6町歩の開田をしました。

その後の安政5年には用水路の戸村堰の改修を手がけ、ふえた水を利用して真坂（いまの八郎瀧町真坂）の湖岸に約15石の新しい田を開き

ました。萩形と真坂の新田開発は、川欠け改修工事を手がけているさい中に行っていたのです。

彦太郎が改修工事や新田開発に投じたお金は、2万6千貫あまりの巨額にのぼります。藩は苗字みょうじを許し、一代だけ帯刀を許すなど彦太郎の功におくいています。

## 社会福祉の先がけ

慶応4年（1868）ぼしん戊辰戦争がはじまると、彦太郎は村の人びとによりびかけ、お金を出して農兵隊をつくりました。負けつづけの秋田藩の手助けをしようとしたのです。気持ちは武士に負けないほどでした。

戦いは五十目村まで及ばないでおわり、新しい明治の時代になりました。村が戦場となって、なにもかも失ってしまったとしたら、もっともっと人びとのためにつくさなければならないと彦太郎は考えました。

村で持っている郷山へ植林をはじめたのは、ききんのときに郷山の林をきったお金で助かったことを思ったからでした。くらしに困る人たちを救う「いんとくこう陰徳講」をつくったのは、明治25年（1892）ですが、その名前から人を救うには表立ってするものではないという考えがわかります。基金の大部分は彦太郎が出し、その利子を使うようになっています。

これは、いまでいう社会福祉の先がけといってもよい事業でした。

彦太郎は月休の名で、和歌と俳句を趣味としています。石井三友、大石孫右衛門、石川理紀之助との文芸上のつき合いは深いものがありました。孫右衛門が月齋を号としたのは月休との交遊からといえます。

五十目村は明治29年（1896）に五城目町となりましたが、それから2年後の31年6月27日、彦太郎は82歳で亡くなりました。彦太郎の子どもの綱松は初代五十目村長をつとめ、その子の金之助も五城目町長をつとめ、いまの「秋田中央交通」をはじめました。



参考資料／『渡辺彦太郎翁伝』村井良八（大正6年）



# 中 村 徳 也

---

短 歌 に 生 き る

## 短歌にめざめる

徳松の長男として、中村徳也は明治28年（1895）6月10日に生まれました。この年には、近代に入った日本がはじめて外国と戦った日清戦争が、勝利でおわっています。

その次の年には、五城目町が発足しています。時代は間もなく20世紀に流れこもうとしている時期です。わが国の近代化も、もちろん五城目町の近代化も、はずみがつこうとしていたところでした。

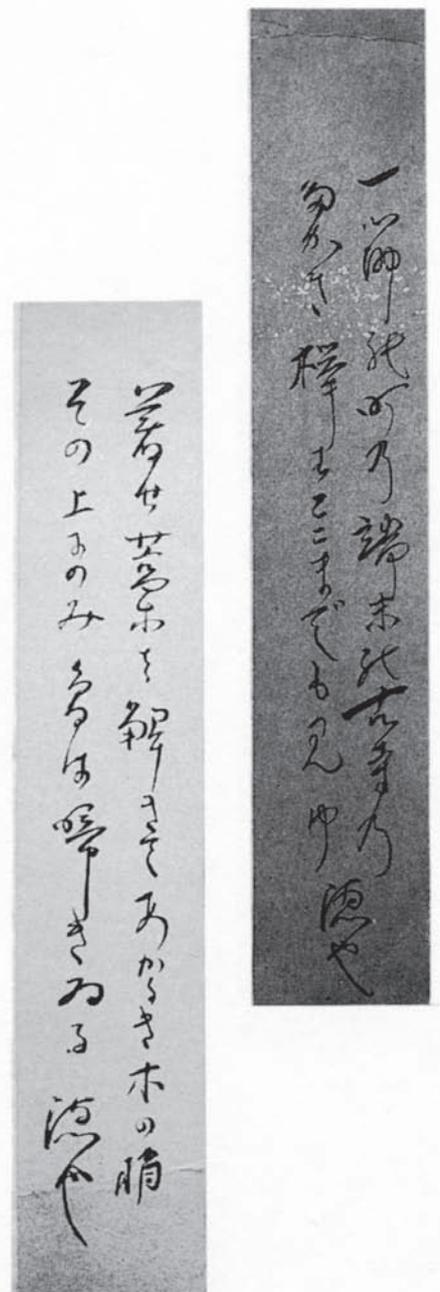
徳也も、そのような時代の空気をいっぱい吸って、成長しました。10代の後半には、もう一人前の文学青年になっていました。

43年（1910）五城目小学校高等科を徳也は卒業しましたが、上の学校にすすめるほどにはめぐまれてはいませんでした。できる子どもだったので、父は徳也を秋田市の石田病院に住みこませました。彼は薬局生となって、まじめにつとめました。

大正元年（1912）ころ、石田病院のとなりの病院に入院した館岡栗山のところへ、徳也は仕事がおわると毎日見舞いに行きました。ふたりの家は近所で、徳也は2歳年上でしたが仲のよい友だちでした。

徳也はまだ二十まえでしたが、「秋田魁新報」の歌壇らんに投稿した短歌が、しばしばとりあげられて、若手の歌人として名が知られるようになっていました。

栗山は画家になろうという夢が大きくふくらんでいる時期で、俳句や短歌にも興味をもっていました。ふたりの話には花が咲いて、時を忘れてしまうほどでした。



自筆のたんざく

## 向学心

上の学校にすすむ希望がかなえられませんでした。それだけに徳也の勉学の志は強いものでありました。

薬剤師やくざいになるために、住みこみの薬局生をしながら熱心に薬学を勉強していました。しかし、将来薬店を五城目町に帰って開業することを考えると、店の経営をするための勉強も必要になります。そこで、夜間の簿記ぼき学校に通うようにしました。

文学青年の徳也は、もっと歌人としての力をのばしたいという気持ちが大きくなってきました。少しの時間でも、徳也は近くの県立図書館にかけつけては、手あたり次第に歌集や歌論などを読み、短歌の勉強にも打ちこみました。

夜学の学校があり、りっぱな図書館があり、近くに短歌に熱心な人びとが多いという秋田市での生活は、徳也の向学心と文芸への志を満足させるものでした。秋田市時代は、徳也の幸せな時代というべきでしょう。

秋田市での生活は、大正8年（1919）までつづきます。このころは、正岡しき子規がはじめた短歌を革新する運動は、ようやく秋田の地にも受け入れられ、子規の『アララギ』につながる歌人が力を持つようになっていました。徳也はそのなかで、若い歌人として注目されるようになっていきました。

## 五城目短歌会

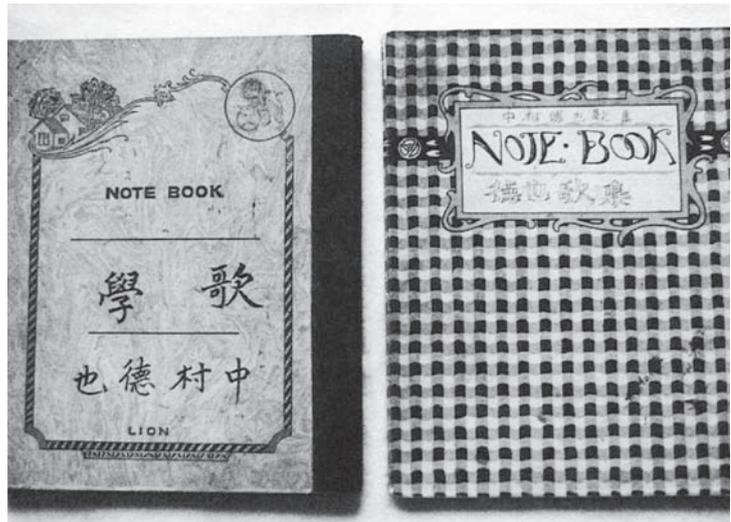
24歳で郷里に帰って来た徳也は、昭辰町の自分の家に薬店を開きました。

彼はただの薬店の若い主人ではありませんでした。帰郷と同時に、短歌の仲間を集めて「五城目短歌会」をつくり、その指導者になったのです。この会は、いまもつづいています。

近所の栗山は、さっそく徳也の弟子にされ、一枝という号を彼からもらいました。それに対して、俳句好きだった栗山は、北嶋南五やきいもの焼芋会に徳也をさそいました。

南五の弟子になった徳也は、杏花きょうかの俳号で県内の中心的な俳誌『俳星』にも、句を送るようになりました。

南五や栗山とのつき合いから、まゆづみぎんしゃ 黛吟社をはじめたくさかいごしやう 草皆五沼との交際にもひろがります。のちに、五沼は不治の病にかかった徳也の主治医として、治療に全力をつくしました。



短歌のノート

## 代表的歌人

昭和に入ると、秋田県の歌壇は秋田市の大黒富治、能代地域の越後策三、南秋田郡の中村徳也の三大勢力が支えていて、それぞれが競い合っている、といわれるようになりました。

ところが、大黒、越後、中村の3人は、『アララギ』に所属して活躍する仲のよい友人でした。3人の文芸上の競争は、秋田県歌壇をおおいにもりあげていたのです。

徳也は策三の出している歌誌『あかね』の指導者となっていたほかに、『樹蔭』にも短歌を発表していました。東京で発行されている歌誌では『アララギ』のほか、『現実短歌』の中心的な同人として活躍して、高い評価をうけています。

ほかに『潮音』や『はおうじゆ 霸王樹』などにも、さかんに作品を発表しました。短歌に対する情熱と努力は、徳也を秋田の代表的な歌人に育てたのでした。

昭和10年（1935）、徳也は短歌新聞の取次所を引きうけ、短歌文芸のニュースを送る通信員となりました。彼の文芸活動は、さらにひろがり、県内の歌人たちの訪れることも多くなりました。



短歌を発表した歌誌

短歌の会合に出歩くこともしばしばでした。

大正11年（1922）27歳で結婚しましたが、徳也の幸せな家庭生活と活発な文芸活動は長くはつづかなかったのです。昭和11年（1936）彼は不治の病で病床<sup>びょうしょう</sup>につくようになったからです。

皮肉なことに、自分の店にある薬がきかない病気の自分を見つめて、徳也は病床日記を書き、おびただしい病中の短歌を残しました。どんな病気も、彼の文芸のはたらきを止められなかったのです。

昭和14年（1939）10月28日、徳也は45歳で世を去りました。栗山の装丁で『中村徳也歌集』が39年（1964）に出版されています。

参考資料／『中村徳也歌集』（昭和39年 新星書房）



# 草 皆 五 沼

---

俳 人 の 医 者

## 中学生の俳人

俳句について五沼は大へん早じゅくでした。

大館中学校1年の明治39年（1906）1月、山崎五風の手ほどきで俳句をはじめると、あっという間に上手になり、先生をうならせるようになりました。

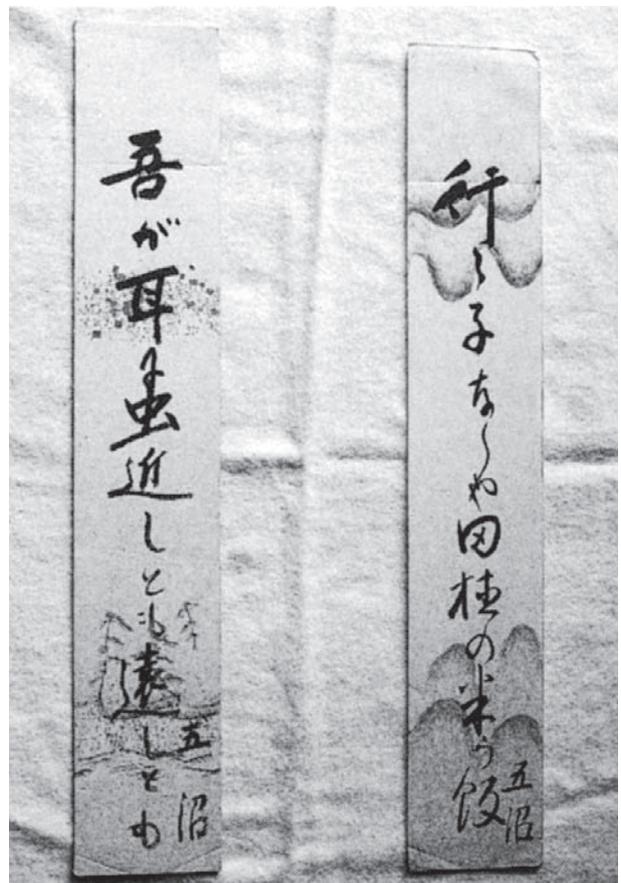
そのころ、大館の町には児玉北水、山崎五風など、力のある俳人が集まる桂吟社かつらがあって、なかなか俳句がさかんでした。中学校の寄宿舎では、毎月句会が開かれ、『鳳雛』ほうすうという俳誌まで出していました。

その俳誌をかざる句が、一年生の五沼でしたから、五風が特別に目をかけたのも無理はありません。五風は自分の俳名から一字をとって、「岳風」がくふうという号をつけてくれたのでした。

五沼は明治24年（1891）に山本郡浅内村（いまの能代市浅内）小川家に生まれました。

能代・山本地方も、江戸時代からなかなか俳句のさかんなところでした。能代には石井露月ろげつが指導する島田五空の俳誌『俳星』が出ていました。鵜川村うかわ（いまの八竜町鵜川）には、佐々木北涯ほくがいという俳人もいました。

五沼の生まれ故郷は、秋田県の近代俳句の拠点に取り囲まれた場所のように思われてきます。中学一年で、師をおどろかしたのもうなずける気がします。師の五風が加わっていた『俳星』に、やがて五沼も入り、さらに腕をみがきますが、五沼は一生『俳星』に所属しました。



自筆のたんざく

## ふたたび俳句へ

中学校4年のとき、彼は脚氣<sup>かっけ</sup>をわずらい帰郷して療養します。家の近くの沼のまわりの散歩を日課にしましたが、そのときに句を作り手帳に書きこんで勉強しています。

沼はちょうど5つありましたので、師五風の号にも通じることから五沼と俳号を変えました。

しかし、このあと五沼は、しばらく俳句からはなれなければなりませんでした。

ひとつは、東京の医学校にすすんだからです。医学の勉強に一生けん命で、自然に俳句から遠ざかってしまったのです。

その後、大正4年(1915)に医師になり、6年(1917)には馬場目帝釈寺<sup>たいしゃくじ</sup>の草皆家の養子となって、その土地で医院を聞きました。医学校を出てからも、五沼はいろいろといそがしく、心の落ちつかないことばかりで、俳句に親しめる状態ではありませんでした。

中学生のとき、あんなに句作に打ちこみ、俳人としての将来を注目されていた五沼が、ふたたび俳句へもどってきたのは、軍隊でひとりの俳人といっしょになったからでした。

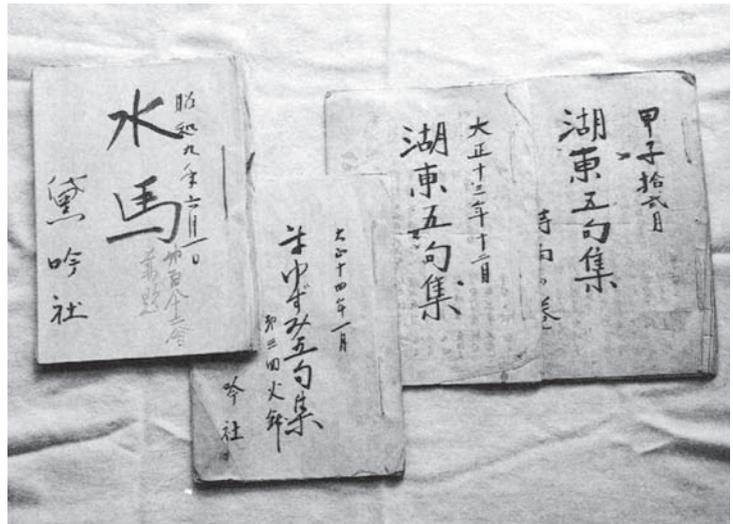
五沼は大正13年(1924)に、青森県弘前市の第52連隊に入隊しました。その連隊に、東京慈恵医学専門学校<sup>じけい</sup>の先輩の石田三千丈<sup>さんぜんじょう</sup>がいたのです。三千丈は、能代の名のある俳人で、五沼の俳人としての成長を見守っていたひとりでした。

入隊してきた五沼が、句作を休んでいるというと、三千丈は俳句をはじめよう強くすすめました。学校の先輩で上官でもある三千丈の指導で、五沼は能代の俳句雑誌『山本十句集』に熱心に句を送るようになりました。

## まゆずみ 黛吟社

2度目の俳句の洗礼をうけて、軍隊から帰ってきた五沼は、前よりもずっと俳句という文芸に熱心になっていました。

医院のいそがしい仕事にもどるとすぐ、大正14年(1925)「<sup>まゆずみ</sup>黛吟社」をつくりました。自分の住んでいるところに、俳句をひろめようと考えたからでした。彼にとって、俳句は生活の中から生まれるものでした。



まゆずみ五句集

吟社の名「黛」は、師とあおく医家で子規の信頼をうけた俳人の石井露月から、いただいたものでした。

彼は、かんたんに印刷ができる<sup>どうしゃ</sup>謄写機を買って、自分で鉄筆をにぎって原紙に文字を書き、それを謄写し、雑誌につづりこむという作業まで、ひとりでするといふ熱心さでした。俳誌は山本十句集を手本に、『黛五句集』と名づけられました。

五沼の吟社には、五城目町での師となっていた北嶋南五も参加して、会員の指導に当たってくれました。そして南五の焼芋会には五沼が参加しました。石井露月と島田五空のふたりを、南五と五沼はともに師としていたこともあって、南五と五沼の親しい交わりは一生つづきました。

## オートバイに乗った医者

医師である五沼は、病院などのない地域の医療に一身をささげるといふくらし方でした。

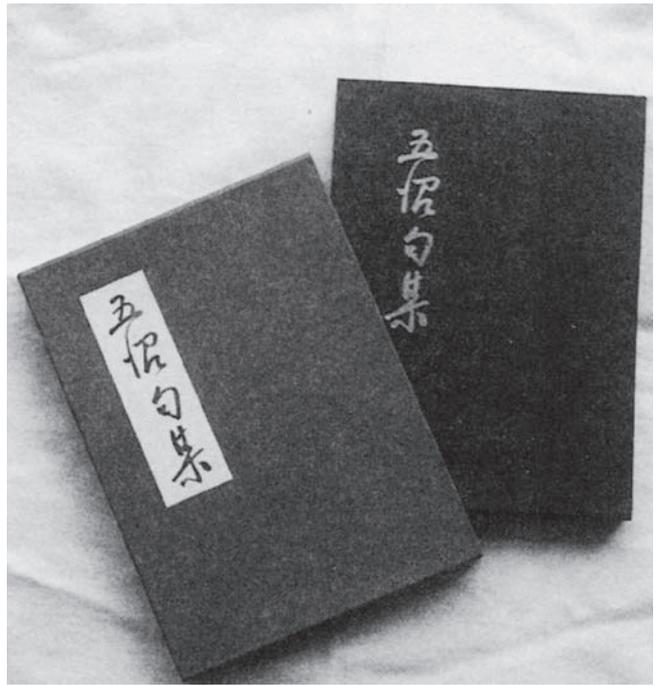
山奥の集落にまで往診するために、悪路を大きなオートバイを走らせる五沼は、村人の信望を集めたものでした。オートバイにまたがった五沼の、飛行帽に大型の風防眼鏡、皮ジャン姿は有名で、子どもたちの人気の的でした。

彼は、新しいメカにいつも興味をもっていました。そして病人のいるところには、どこへでもオートバイで駆けつけました。

句会にもオートバイで出席しました。五沼は行動的な人で、それまでの俳人とはちがった俳人でした。

昭和39年（1964）11月11日、五沼は74歳で他界しました。1300句をおさめた遺作集『五沼句集』が、42年（1967）に出版されています。

黛吟社はいまもつづき、『黛五句集』も会員の句を集めて出されています。五沼の俳句への考え方と熱い心は、いまも生きています。



参考資料／『五沼句集』（昭和42年 黛吟社）



# 大石孫右衛門

---

川の改修と新田開発

## ひろいつき合い

孫右衛門まごえもんは、江戸時代のおわりごろから明治時代にかけて、五城目付近の俳句の指導者として名の高かった人です。号を月齋げっさいとといいます。

月齋が、となり村の友人である石井三友とともに、俳句の師としたのは、そのころの秋田の俳人の第一人者といわれた秋山御風でした。さらに久保田（いまの秋田市）の俳人中で指導者とされていた会田素山や石川二葉のところにも出入りして、俳句を学んでいます。その熱心さには、おどろいてしまいます。

五城目付近の俳人や歌人とのつき合いも、ひろい人でした。どんな句会にも、よばれると出かけていったそうです。

この地域の神社やお寺には、奉納した俳句や和歌の額がかかげられています。その額に、つき合いのあった人びとの名前といっしょに、月齋の名前もよく見られます。俳句のつき合いのひろさが、よくわかります。

## 芭蕉の句碑

住んでいた下山内村（いまの五城目町下山内）と五十目村（いまの五城目町の本町地域）との境めの道のかたわらに、大きな句碑がたっています。碑の正面には、芭蕉ばしょうの句がほられています。碑をたてたのは孫右衛門ですから、月齋の本当の俳句の師はずっとまえに亡くなっている芭蕉で、芭蕉がすすめたような句を作ろうと考えていたのではないのでしょうか。

分厚い碑の左右のわきには、月齋の句と黒土村の石井三友の句がほられています。三友は学問好きで、よく久保田の先生たちのところへ出入りしていますが、久保田の往復で孫右衛門といっしょになることも、多かったのでしょうか。それに、



芭蕉の句碑

三友は俳句好きでしたから、句会のたびに同席したと思われます。

芭蕉句碑に、それぞれの句をきざみこむほどに、月齋と三友は親密な句友だったのです。それだけでなく、三友は年下の孫右衛門からいろいろと教えられるところもあったらしく、三友は『御恩頂戴備忘集』という1冊を書いています。

孫右衛門と三友は、おたがいに村の肝煎きもいり（村長の役）としても助け合っています。

## 孫右衛門の名をつぐ

孫右衛門は、天保5年（1834）2月5日に浅見内村（いまの五城目町浅見内）松橋藤右衛門の四男として生まれました。名は得三郎といました。

21歳のとき、大石家の養子となり、やがて代々名乗っている孫右衛門に名を変えます。また、大石家は代々下山内村の肝煎をつとめる家でしたので、家をついだ孫右衛門も村の肝煎になりました。

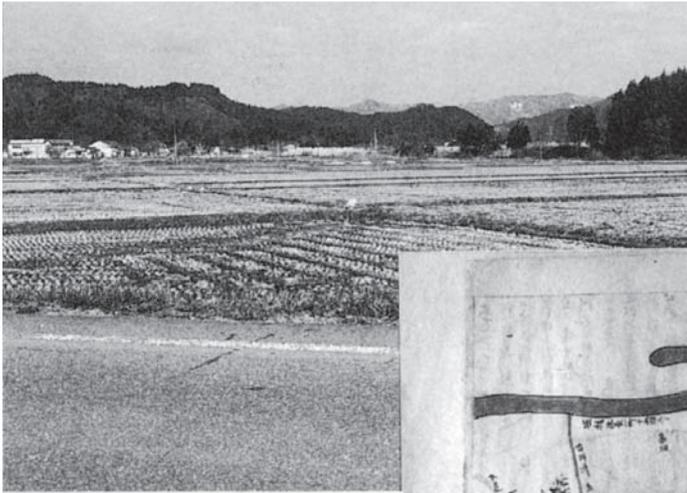
孫右衛門の生まれた年は、天保4年の「天保巳年のけかじ」とよばれる、大ききんの次の年で、凶作きょうさくのために死者が多く出た年でした。社会不安のはげしい時期でした。そういう星の下もとに生まれた、孫右衛門の進む道すじが自然に見えてくるような気がします。

## 川の流れ

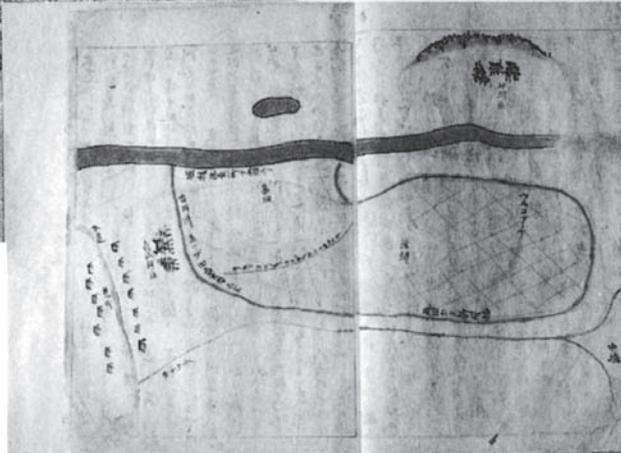
そのころ、富津内川は下山内村の中を、大きくうねりながら流れていました。

広ヶ野の台地の東はずれのあたりから、中島集落の近くまで、川はまがりこんでいました。流路は、庄屋淵しょうやぶちや鶴コ淵という深いよどみをつくって、流れを悪くしています。

大雨が降って、洪水こうずいになると流れが悪いので、流路のまがったところの水位が上がって、田畑が濁流にのみこまれることは、しばしばです。そればかりか、川岸がこわれて、土地が流れの中に欠けこんでしまいま



開田された場所



まがった流路と工事後の川の図

した。よい耕地が失われてしまうのです。

このような洪水の害を防ぐには、川の流れを直線にして、よどみをなくして流れをよくするしかありません。そこで、川すじ掘りかえ工事を、文化年間（1810年ころ）、文政年間（1825年ころ）、天保年間（1835年ころ）と、なんども行いましたが、うまくいきませんでした。

肝煎になった孫右衛門は、掘りかえ工事をする決心をしました。

村の中の川欠けは、420間（約760メートル）にも達していて、このままでは下山内村の将来にもかかわることになる、と考えたからです。工事が成功すると、川欠けが防がれるだけでなく、新しい土地も生まれるという利益もあります。ですから、この工事は村のためにどうしてもやりとげなければなりません。

## 掘りかえ工事

高畠という広ヶ野から突き出た高さ10メートルの丘を掘り抜き、庄屋渕まで流路を直線化するのが、孫右衛門の考えた計画でした。

村人のだれもが、できるはずがないといって反対しました。これまでの工事が全部失敗しているのですから、村人の反対も無理がありません。

それに対して、孫右衛門は「愚公、山を移す」という中国に伝えられる話をして、10年でも20年でもかけて、やりとげるつもりだとこたえました。孫右衛門のかたい決意をきいて、村の人びとは協力を約束しました。

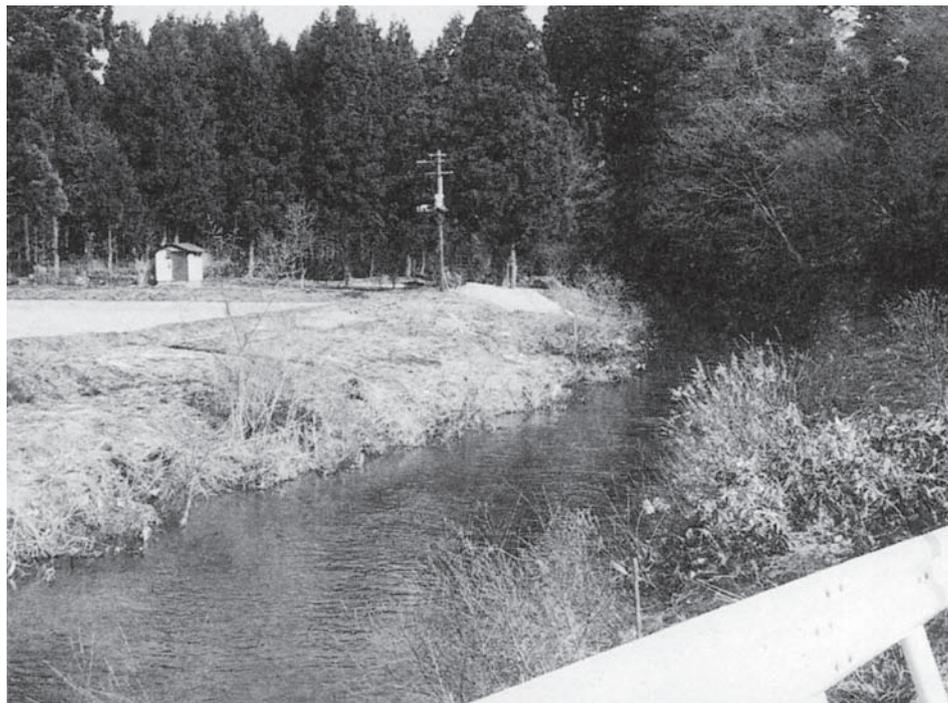
工事をはじめたのは、万延元年（1860）ころといわれています。次の明治時代まで、もう10年もない、というときです。

予想以上の難工事でしたが、10年あまりの年月を掛けて明治6年（1873）10月にとうとう完成しました。これは、孫右衛門のねばり強い努力だけでなく、私財まで投じて工事をつづけたことや、岩石をうちまく工法の工夫などがあって、成功にこぎつけたのでした。

この富津内川流路の直線化で、川欠けによる本田の流失と五十町歩が水びたしになる被害が防がれるようになりました。また、古川のあとに五町歩あまりの新しい水田も開くことができました。

いまの下山内と上山内の中島の国道のあたりが、昔の鶴コ湊だったところす。国道の南側一帯の美田は、そのときに開田された場所です。

孫右衛門は、その後小倉ヨシロ坂と蟹場沢かにばに、500間（約900メートル）あまりの新道も開いています。この工事も、すべて私財によるものでした。



下山内地区を流れる富津内川

## 村長をつとめる

孫右衛門が肝煎をつとめているうちに時代が変わり、明治4年（1871）に秋田県がおかれ、11年（1878）には村に戸長をおくきまりになりました。

掘りかえ工事に一生けん命だった時期と時代の変わり目とがいっしょになっていますが、工事完成の6年には、孫右衛門は下山内村<sup>そうだい</sup>惣代になり、それから戸長をつとめています。

明治22年（1889）に富津内村が発足しましたが、孫右衛門はみんなに推されて、初代の村長となりました。2代目村長は、息子の喜代治がつとめています。

隠居<sup>いんきよ</sup>になって、ゆうゆうと俳句を楽しんだ月齋の孫右衛門は、明治36年（1903）12月2日、70歳で死去しました。

大石家には、64歳の時の孫右衛門の肖像画<sup>しょうぞう</sup>が残されています。作者は久保田の画人で孫右衛門の知人萩原白銀齋勝章です。孫右衛門をたたえる文章を書いているのは、友人の石川理紀之助です。

紋付羽織に袴で、やや背を丸めておだやかに座っていますが、その意志的な表情が印象的です。そこには、明治という新しい時代を地域の指導者・社会事業家として生き抜いた人らしい空気がただよっています。

昭和18年（1942）、村は中島八幡神社の境内に孫右衛門の功績をたたえる碑をたてました。



孫右衛門をたたえる碑

参考資料／『御恩頂載備忘集』石井三友



# 渡 辺 銀 雨

---

川柳をみんなに

## 川柳の町

昭和58年（1983）8月16日は、まだ月おくれのお盆休み中でした。その夜、五城目町の人びとは、NHKテレビの画面を食い入るように見ていました。

テレビは「よめやうたえや川柳天国」を放送していました。番組は、細越の渡辺銀雨の家にカメラをすえての、全国に向けた生放送<sup>なま</sup>でした。

自分たちの町からテレビ放送されるなど、めったにないことです。そのうえ、画面の人びとが、銀雨をはじめとしてみんな知り合いばかりですから、誰もが、かたずを飲んで見ないではいられなかったのです。川柳仲間にかこまれ、そのまん中にすわった銀雨は、にぎやかな番組に出演した千両役者のように見えました。それもそのはず、銀雨はみんなの川柳の先生でした。

この日から、五城目町は、「川柳の町」として注目されるようになりました。



渡辺家（細越）

## 母のすすめ

川柳人渡辺銀雨の本名は彦次郎といいます。明治42年（1909）9月26日、字上町（小池町）の商店に生まれました。

家業を手伝っていた20歳のころに、

「彦次郎、川柳をやってみないか。人間は、なにかひとつ趣味を持っていないと、だめなものだよ。川柳って、なかなかおもしろいものだから、やってみれ。」

と、母タニに川柳をすすめられたのです。

「彦次郎は、川柳がうまくなりそうだ。」

そのとき、母にいわれたことばを、いつまでも銀雨はおぼえていました。

タニは川柳が趣味でした。大正時代は、全国的に川柳が流行し、各地に川柳を楽しむグループができました。五城目町には、めずらしいことに女性の川柳の会があって、タニもその会員でした。毎月集まって川柳の勉強をする熱心さで、家が会場になったときは、銀雨も加わって、みんなの批評をうけました。

## 仲間たち

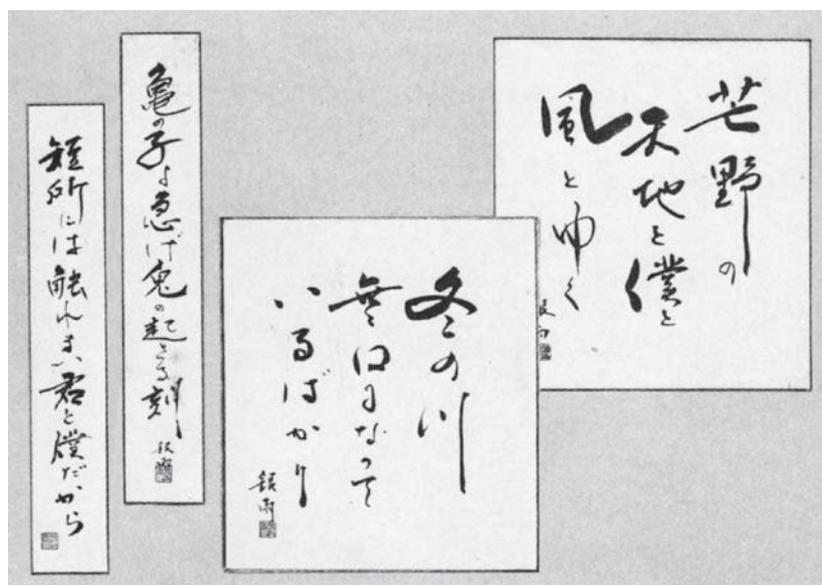
銀雨の川柳は、母タニにすすめられるままに、なんとなくはじめたものでしたが、母と同じ屋根の下で暮らしているのですから、いつも川柳といっしょにいるようなものでした。

そして、川柳の楽しさにいつの間にかとりつかれていました。

町には、川柳をしている人たちが多くいて、いくつかのグループをつくっていました。さそわれて、あちこちの川柳の集まりに出ていると、銀雨の作品はいつも注目されました。

川柳は短詩型<sup>たんしけい</sup>の文芸ですから、いそがしい店の仕事の合い間でも、ふと目にうつり心にうかんだことを、17文字でメモしておけます。銀雨は、日記のように毎日川柳をノートに書きつけるようにしました。

自分の気持ちにも生活にも、もっとも合った文芸は川柳だと、ノートの句が多くなるにしたがって、銀雨は強く思うようになりました。一生、川柳を勉強していこうと心で決めたのです。



自筆の色紙とたんざく

そういう想いが高まってきて、仲間を集めて昭和11年（1936）「すずむし吟社」という川柳の会をつくりました。10数人の仲間は、すべて20代です。27歳の銀雨が会長役になりました。それから亡くなるまで、銀雨はすずむし吟社の責任者をつとめ、仲間は後輩の世話や指導をつづけました。

この若い人たちだけのグループの世話役は銀雨でしたが、はじめ川柳の指導者になってくれたのは、町の柳人貝田乱声でした。

銀雨は家業の店の手伝いをし、趣味は川柳ひとつというような人ではありませんでした。草野球のメンバーだったほかに、町の若者の集まりなどにもよくさそわれ協力したりしていました。「彦さん」とだれからも声をかけられ、友人知人の多い人でした。そして、みんなに信頼されるようになっていました。

いろいろな人とのつきあいや、いろいろな体験と見聞が、銀雨の川柳を豊かなものにしたのです。

## 太陽に問えば

すずむし吟社が発足した次の年、昭和12年（1937）日中戦争がはじまりました。戦争は、さらにひろがり、昭和16年（1941）太平洋戦争が起こりました。

吟社は若い柳人ばかりでしたから、次々に召集され戦場に向いました。20名近かった吟社は、わずか3名になってしまいました。

銀雨自身にも、昭和19年（1944）の暮れに赤い紙の召集令状が来ました。35歳の銀雨は、ひとりの兵士になりました。そのころの日本には、もう戦争をつづける力はなくなっていて、敗戦が間近でした。

銀雨にとって、軍隊は楽しいところではありませんでした。若くないのに一番下の位の兵士だと、位の上の者にいじめられる場合も少なくありません。

ある日、疲れ切った銀雨は、「小休止」の号令と同時に演習地の草原にたおれこんでしまいました。仰向けになった顔の上に、夏の太陽がありました。

太陽に問えば <sup>あした</sup> 明日があるという

そのとき、自然に口をついて出たのがこの1句でした。

どんな苦しいことにも、明日があると思えばたえられる。その明日は、きっとすばらしいだろう。そういう思いが、胸をひたしてきました。川柳に助けられた、と銀雨は思いました。

それから間もなく、長かった戦争はおわりました。

## 吟社ふたたび

会員が召集されて休んでいたすずむし吟社は、戦後に会員が集まって、ふたたび活動しはじめます。銀雨が中心になったことは、いうまでもありません。

いまは楽しむだけのものではなく、川柳は銀雨にとって、生き方になっていました。川柳の心で、社会の動きも見つめようとなりました。

川柳に対する真けんな取り組みは、すばらしい作品を生み出しました。その結果、川柳誌の『宮城野』『<sup>みやぎの</sup>さいたま』『時の川柳』などの年度賞を、次々に受けることになりました。

「秋田県に渡辺銀雨あり」と全国の柳人が注目するようになりました。そうすると、いろいろな川柳大会やコンクールの審査員、選者にたのまれるようになります。新聞の柳壇の選者も長年つとめました。

川柳活動で年々いそがしくなりましたが、銀雨は戦後にはじめた印刷



川柳の仲間たち（前列まん中が銀雨）

業の仕事を、決して人まかせにしたりはしませんでした。文芸活動と職業を両立させ、その上でりっぱな作品を生み出したのです。

吟社をふたたびはじめてから30年の昭和51年（1976）、67歳の銀雨は吟社の川柳誌『すずむし』を月刊にします。全国的な川柳の団体、といっても数えるほどしかありませんが、それが月刊で柳誌を出しているだけです。地方の川柳の会が、月刊柳誌を出すというのは、柳人の間で大きな話題になりました。

印刷所を銀雨が持っていたこともありますが、すずむし吟社は月刊にできるほどに全県からたくさんの会員を集めていました。『すずむし』は、いまでも月刊をつづけています。

銀雨は自分の句作の努力だけでなく、川柳の同好者をふやすことや、後輩を育てることに力も注ぎました。町の婦人会や中学校に川柳クラブをつくることをすすめ、よろこんでその指導に出かけました。各地のグループの指導にも出かけています。生活にとけこむ短詩型文芸の川柳を、銀雨は自分の経験から考えて、人びとにひろげたかったのです。

師を持たなかった銀雨が、川柳作家の名が高くなったのは、いつも自分の目でものを見てこつこつと勉強をつづけたことが第一ですが、よい仲間と家族にめぐまれたことも見落せません。家族みんなが、銀雨を師にして、句をよみ合うという、めずらしい川柳一家が銀雨の文芸活動を支えていたのです。



川柳句誌『すずむし』

## 句 碑

70歳になった昭和54年（1979）、町は長い間の活動に対して功労者の表彰をしましたが、NHKテレビに出演したあとは病気がちになりました。「よめやうたえや」とにぎやかに川柳の会を行うわけにはいなくなりました。

川柳を教えてもらった多くの人びと、友人や知り合いの人たちが、募金をして、銀雨の川柳句碑を<sup>しと</sup>四渡園にたてたのは、昭和60年（1985）9月15日でした。碑には、「太陽に問えば」の句が刻まれています。

銀雨が亡くなったのは、句碑がたって10日後のことでした。76歳でした。



銀 雨 の 句 碑

参考資料／『句集 共に生きて』（昭和60年）



# 福田笑迎

---

天才的画家

## 新しい時代の子

福田笑迎<sup>しょうげい</sup>は明治2年（1869）10月18日、五十目村（五城目町）字上町202番地（小池町）の薬種商の家に生まれました。名前は貞助といます。

父の勘助は町の旧家米田家から、あと取りのいない福田家に養子におかえられた人でした。ですから、貞助は福田家の人びとが長い間待っていた男の子、総領<sup>うぶごえ</sup>だったのです。貞助は、家族や親せきみんなによろこばれて産声<sup>うぶごえ</sup>をあげたのでした。

貞助が生まれた明治2年といえ、つい1年前の9月に戊辰戦争<sup>ぼしん</sup>がおわったばかりです。戦争のときは、幕府方の勢いがよく五城目にまで攻めこんで来るのではないかと、人びとはおびえたものでした。武士の世の中がおわって新しい時代がはじまりましたが、まだ社会はざわついていたのです。

それでも、時代の流れははげしく、4年（1871）には藩が廃されて秋田県になり、お金は厘・銭・円という新しい単位にかわりました。五十目村にも、7年（1874）に郵便局と小学校ができました。両方とも貞助の家の近くでした。こうしたことを見てくると、貞助は「文明開化」の申し子として、生まれてきたようにも思われるのです。

貞助の一生は、そのことを思わせるに十分です。

## ふしぎな小学生

すぐ近くの小学校に入学した貞助は、先生たちにとって困った子どもでした。

「貞助には、小学校の勉強はいらないなあ。」

困ったように先生はいいます。

「なにも教えることがないから、ほかの子どものじゃまにならないように、自由にさせたらどうだろう。」

「貞助のような子どもを、神童<sup>かみどう</sup>というのだろう。」

小学校で学ぶことよりも、貞助はずっと先の方を歩いていたのです。

家の土蔵には、それまで求めた江戸時代からの絵入り読みもの草双紙くさそうしやさし絵のある小説の読本よみほんなどが、たなにいっぱい積んでありました。

また、代々の福田家の主人たちが買い集めた、書や絵の掛け軸じく、絵巻、浮世絵なども、たくさんありました。



ふすま絵「中将姫図」

小学校入学前から、貞助は文化のつまっている薄暗い蔵の中で、すごい勉強をしていたのです。まず絵入りの草双紙を読むことをはじめました。読書は読本にすすみ、小学校をおえるころには、漢籍かんせきなどのページをひらくほどになっていたのです。

貞助は、書にも絵にも大きな興味がありました。掛け軸をひろげ、浮世絵をめくっているうちに、貞助は自分で絵を描いてみたくなりました。「絵の道具がほしい。」

貞助がいうと、「どうして。」ともきかず、父は絵描きが使うような道具を、ひとそろい買ってくれます。両親にとっては、家の跡取りあとの貞助がかわいくてしかたありません。その息子が、勉強むすこしたい練習したいという、その才能のゆたかなのに、ただただうれしくなってしまうのでした。

道具をもらった貞助は、毎日のように蔵の中にとじこもって、熱心に絵筆を動かしていました。

どれもこれも、およそ子どもらしくない知識や技能は、蔵での独学によるものでした。先生たちが困ってしまうのも、無理がありません。

いまも福田家には、貞助が子どものころに毎日練習で描いたという白描びょうが、おしいれいっぱいに残っています。きびしい絵のけいこにはげんでいたことがわかります。

「神童」とよばれ、人びとが舌したをまいた絵の才能は、人並みはずれた努力の結果だったのです。

## 子どもの画家

村の人びとは、10歳の貞助に絵を注文するようになりました。それに応じた作品には、瑞<sup>ずいとう</sup>稲とサインしています。貞助が12歳の明治14年（1881）秋、東北地方を御巡幸中の明治天皇が、秋田県をお通りになりました。このときから、号を笑迎と変えています。

11歳のころまでの笑迎の作品は、福田家が所蔵していた文人画、狩<sup>か</sup>野派<sup>のうは</sup>の絵、浮世絵を手本にして、ひとりで学んだことがよく理解できるような、三つの画風がまじった作品になっています。

しかし笑迎と号を変えたころには、手本からはなれ、笑迎独特の作品になりました。師匠にもつかずに、ひとりで自分の画風をつくり出したことは、おどろくしかありません。町内に保存されている絵は、人物を中心としたものが多く、笑迎の読書から得た歴史や物語の知識を生かした内容になっています。

笑迎の絵を見ると、これが10代の少年の筆から生み出された作品とは、とても思えません。笑迎の天才を感じてしまいます。

## 上の学校へ

家業をつがせるために、父は仕事をおぼえさせようと、小学校をおわったら秋田の薬種屋<sup>ほうこう</sup>へ奉公に出すつもりでいました。そのころは、どんなお金持ちでも総領の息子は、家業をつぐ前に奉公に出るのが普通だったのです。

しかし一方では、息子の持っている豊かな才能や向学心を考え、他人のところで苦しい奉公をさせるのはかわいそうだ、と父は思うようになっていました。

「もっと勉強したい。だから上の学校に行きたい。絵の方も、もっとやってみたい。」

「そういったって、おまえは家の跡取りだよ。絵描きにはさせられない。」

「画家になる気はない、趣味でつづけるだけです。学校を出たら家に帰ってくるから、ゆるしてください。」

父と子の意見がちがい、ことばのやり取りはありましたが、最後に父は笑迎のいい分を通してくれました。

希望通り、笑迎は秋田中学校（いまの秋田高校）にすすみました。中学生になっても、笑迎は絵筆をはなさず、細かな描写とはなやかな色彩の人目をうばう作品を生み出します。

ふすま絵やびょうぶ絵を好んで描きましたが、五城目町の指定文化財になっている「大江山図びょうぶ」や「中将姫図」「六歌仙図」などは、代表的な作品です。



「大江山びょうぶ」の一部

## 政治家をめざす

福沢諭吉の『学問ノススメ』を読んだ笑迎は、さらに東京へ出て慶應義塾（いまの慶應義塾大学）に学ぼうと決心します。その決心を、父はゆるすはずはありません。笑迎は、とうとう家出同様に上京しました。

慶應義塾で哲学を学んだ笑迎は、てつがく中江兆民なかえちようみんの講義をうけ強く感じるものがありました。もう絵筆をとるといいうとまはありません。時代は、自由民権運動がいっそう高まりを見せ、憲法の制定と国会の開設が間近にせまっていました。（憲法は明治22年に制定され、23年には第1回衆議院総選挙が行われました）中江兆民は、政治運動の中心人物のひとりでした。

笑迎は政治家になろうと思いました。家業をつぐわけにはいきません。家業は妹についでもらうことにしました。

東京で新聞記者をしながら、笑迎は政治家を目指して活動をつづけ、次第に人びとの注目を集めるようになります。

政治家の第一歩は国会議員になることです。笑迎は東京でよりも生まれ故郷で選挙にうって出ようと考え、明治23年（1890）22歳になった笑迎は、秋田に帰りました。そして、自分の政治上の考えを、県民に知っ

てもらうには新聞によるのが一番と思い、明治29年（1896）仲間と「秋田新聞」を発行します。この年、五十目村は五城目町となっています。

しかし近代化のおくれていた秋田では、笑迎の新しい政治の考えは、選挙民に理解されなかったようです。衆議院の選挙では、わずかの差で当選できませんでした。

## 早い死

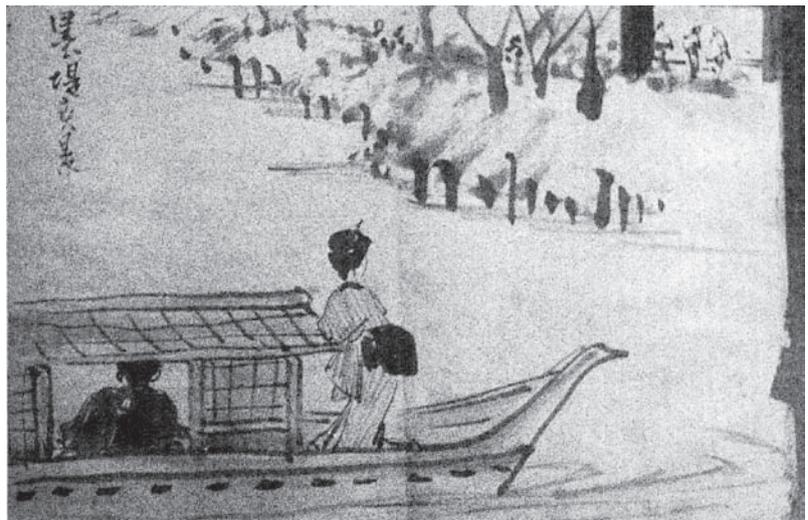
失意のうちに、明治39年（1906）笑迎はふたたび東京に出ました。

東京では、フリーライターとして新聞や雑誌に文章を発表し、その後新聞社につとめました。そのころになって笑迎は写生帖を持ち歩くようになりました。

政治活動のあわただしさに忘れていた、笑迎の絵心がよみがえったのです。また、故郷のこともなつかしく心に浮かんできます。それが、『評伝四ツ車大八』を書かせます。

ようやく本来の自分を取りもどしたとき、もう笑迎の持つ時間は残り少なくなっていました。明治42年（1909）10月16日、40歳の若さで笑迎は亡くなりました。

あふれるほどの才能を、生かしきれずに他界したのは、まことにおいしいといわずにいられません。家業をつぎながら、その画業をさらにのばすことができたなら、とってしまえます。画家として活躍したのは、10代の10年間でした。早熟の天才というべき人でした。



写生帖の絵

参考資料／『人・その思想と生涯 福田笑迎』小野一二（昭和49年「あきた」9月号 秋田県広報協会）

執 筆 者／元五城目町立内川小学校長  
小 野 一 二

目次イラスト／成 田 哲 也

五城目町のほこり

すばらしい先輩たち 3

平成7年3月31日発行

編集発行／五城目町教育委員会

〒018-1723

秋田県南秋田郡五城目町上樋口字堂社75

印 刷／湖東印刷所

〒018-1724

秋田県南秋田郡五城目町字下夕町13-5